連体修飾節のとらえ方―序説

松木正恵

【キイワード】格関係・意味関係・評価性・相対性・感覚の名詞

一　はじめに

連体修飾節と被修飾名詞の構造を分析する場合、現在最も広く取り入れられているのは、装定と述定の置き換えという手法であろう。例えば次のように、連体修飾構造を大きく二分する考え方である。

I　太郎が花子に贈った指輪→太郎が花子に指輪ヲ贈った

II　太郎が花子に指輪を贈った話

↓＊話ガ／＊話ヲ／＊話ニ／＊話デ／……

太郎が花子に指輪を贈った

Iは述定表現に展開可能で、その際、元の被修飾名詞は述語用言と何らかの格関係を有しながら述定文の成立に参加している。逆に言えば、述定文の中から抜き出した一つの補語を後置し格助詞を取り除くことによってできる連体修飾構造ということになる。このようなタイプを寺村秀夫は、「修飾部の用言に対して補語と考えることのできるような関係を内在しているもの」として「内の関係」と呼び、また奥津敬一郎は、「被修飾名詞と連体修飾文中の名詞とが同一」であるため消去された「同一名詞連体修飾構造」と呼んだ。一方IIは、述定表現に展開することが不可能であり、被修飾名詞と連体修飾節の述語用言との間にIのような格関係を想定できない。このようなタイプを寺村秀夫は、「底の名詞は修飾部のどこかから取り出されて被修飾語の位置に坐ったものとは言えない、（中略）修飾部の外から来たもの」として「外の関係」と呼び、また奥津敬一郎は、「補足句の中には被修飾名詞と同一の名詞を含まないという条件がある。つまり名詞同一の条件によらず、連体修飾文中にない名詞を外から付加して名詞句を形成する」ため「付加名詞連体修飾」と呼んでいる(1)。

装定と述定の置き換えによる分類は、連体修飾節と被修飾名詞の意味関係のみに着目した分類より客観的で明快な印象を与えるが、実際に分析を試みると、様々な問題が生じてくることも確かである。寺村自身、「内」と「外」にきれいに二分されるものではない点を認めているように、どちらかに決定するこ

とが困難な事例も多い。本稿では、分類基準の問題点に触れながら「内の関係」と「外の関係」の境界領域を探るとともに、新たな分類基準を模索していく。本稿を序説として、今後の研究の方向性を定めるべく、筆者なりの枠組みを提示しておきたいと思う。

二　動詞句から名詞への意味的関係に着目した分析

まず、寺村・奥津に代表される、連体修飾節中の述語用言と被修飾名詞との統語的関係を重視した分析は、真の意味で連体修飾構造の分析に成り得ているのだろうか。この手法では、被修飾名詞と連体修飾節の述語用言との間に何らかの格関係を想定し得るか否かという見方をしており、言ってみれば名詞から動詞へのかかわり方を観察しているに過ぎない。ところが連体修飾構造というのは、先に立つ連体修飾節と後に続く被修飾名詞との関係をとらえるべきものであるから、むしろ動詞句から名詞へのかかわり方を見る必要がある。例えば、

①　赤い頬をした少女
　　↓？少女ガ赤い頬をした（内の関係―主格）

とパラフレーズした場合、格関係としては確かに「少女」は主格だが、「少女が赤い頬をした」という述定文は不自然だろう。次も同様の例である。

②　金色の校章がついた帽子
　　↓？帽子ニ金色の校章がついた（内の関係―場所格）

①②は、連体修飾節が被修飾名詞の属性を表しているもので、連体修飾節の述語動詞「した」「ついた」は装定として機能してはいても、そのまま述定に変換することができない。テンスなど、動詞としての重要な性質が既に失われているからである。

③　困った事態だ↓＊事態ガ／？事態ニ／？事態デ　困った
④　君も弱った人だね↓＊人ガ／＊人ニ／＊人デ　弱った

③④になると、「困った」「弱った」の動詞性はさらに薄れ、むしろ形容詞に近づく。ここに至っては、もはや格関係に戻す操作など無意味と言ってよい。

高橋太郎は、このような属性を表す連体修飾節をはじめ様々なタイプの連体修飾節を実例から収集・記述している。そこでは、あくまでも動詞句から名詞へのかかわり方が重視され、格関係に基づく置き換えでは見落とされがちな意味的関係について、独自の観点から詳細に分析が施されている(2)。動詞句から名詞へのかかわりという点について、先に見た属性を表す連体修飾節に言及しながら、高橋は以下のように述べる。（少し長いが、研究の立場の表明として重要と思われるのでそのまま引用しておく。）

もちろん、〈名詞＋動詞〉と〈動詞＋名詞〉は、対応がある。けれども、〈動詞＋名詞〉における動詞と名詞の関係の意味と形式に関する諸特徴は、〈動詞＋名詞〉そのものなかにもとめられなければならないのである。

理論上の問題として、〈動詞＋名詞〉は、〈名詞＋動詞〉のおきかえではない。カザリはカザラレを限定するという、シンタックスの基本からいっても、両者はべつものである。

それに、連体形であることによって、動詞の形態論的な性格がかわるし、さらに、おきかえにとって致命的なことは、属性づけのかかわりをする動詞句のなかで、動詞がヴァレンシーをかえることである。あっちからこっちへまわるということは、ネクサスとジャンクション（筆者注…述定と装定）のなかで同一の動詞は、同一のヴァレンシーをもつことを基礎にしているのだが、その基礎がくずれると、これは、なりたたなくなるのである。それから、両者のあいだに対応のあるもののばあいに、ネクサスのほうが土台になるということは、ぜんたいをおおわない。属性づけのなかで発達した、動詞の形態的な、あるいは、動詞句の構文的な諸特徴は、連体形のほうがもとであって、それが述語形のほうにもおよんでいくというものがある。それは、形容詞のばあい、〈形容詞＋名詞〉のほうが、〈名詞＋形容詞〉よりも基本的であることとつながる。

（注2の文献D　四一五ページ）

このような立場で分析した結果、高橋は動詞句の名詞へのかかわりのタイプを五つに分類している。高橋の挙げる用例を一部添えながら、次に紹介してみよう。

ア、関係づけのかかわり

aかれは小間使いのくばった紅茶ちゃわんをとりあげ、しずかにくちびるにあてながら、（野上弥生子「真知子」）

bそうして自分があざむかれた返報に、ざんこくな復しゅうをするようになるものだから。（夏目漱石「こころ」）

cおもやでメザシを焼くにおいがする。

（林芙美子「放浪記」）

イ、属性づけのかかわり

dびっくりするような最低音でものをいう背のたかいノヴアミルスキーのほっぺたと同様に（宮本百合子「道標」）

e九月下旬の日あたりはゆくさきのいりくんだ町々をおくふかくしてみせていた。（島崎藤村「桜の実の熟する時」）

ウ、内容づけのかかわり

fその日のこがらしが野山をふきまくる光景はすさまじく

（島崎藤村「千曲川のスケッチ」）

gわたしはなるべく彼にさからわない方針をとりました。

（夏目漱石「こころ」）

エ、特殊化のかかわり

hむすめは心から同情する気もちをかおにあらわした。

（岡本かの子「河明り」）

i篠原が秋子以外に手をだしている事実は、いまはじめて知ったのだ。

（高見順「故旧忘れ得べき」）

オ、具体化のかかわり

jやどやのゆかたがけで、このわらっているかっこうは、どうしてもうつしてくれている人がおとこね。

（佐多稲子「くれない」）

kおちばのようなものを束にゆわえて荷にするしかたについて、百姓たちは工夫している。

（島木健作「生活の探求」）

（注2の文献D　三四五～三八三ページ　例文の記号は筆者）

高橋の方法は寺村・奥津とは分析の観点が全く異なるが、挙げられている用例から判断しながら強いて「内の関係」「外の関係」との対応を示そうとすれば、ア・イが「内の関係」、ウ・エ・オが「外の関係」にほぼ相当することになろう。しかし、大きく異なる点が一つある。それは、アの「関係づけのかかわり」に「内」「外」両方の用例が含まれていることである。前掲のaは「内」、bcは「外」にあたる。これは、動詞句と名詞が事柄のレベルで同じ枠組みに収まっていれば関係づけのかかわりとみなすという意味関係重視の立場をとり、格関係への変換という形式的操作に頼らないことによるものである。筆者としては、高橋の意味関係のとらえ方には疑問も残るが、意味関係を重視する立場には賛同できる。また、「内」「外」のある部分が、意味的には同じ枠組みとみなされることもあり得るという事実は、形式的操作においても両タイプがクリア・カットに二分されるとは限らないとする寺村の指摘にも符合しており、興味深い。次節以降でこの点について具体的に検証してみたい。

三　「内の関係」と「外の関係」の境界領域1
―格関係と意味関係

⑤　学会名簿に登録する名前は旧姓にしている。

↓1　学会名簿に（ある）名前ヲ登録する

↓2　学会名簿に（ある）名前デ登録する

⑤は明らかに「内の関係」だが、「登録する」と「名前」の格関係には二種類考えられる。しかし、どんな格関係に置き換える可能性があるかではなく、元の文の意味をどちらがより反映しているかという視点で見ると、まず想定されるヲ格ではなく、むしろデ格の方がふさわしいように思われる。また一方で、⑤は次のように考えることも可能である。

↓3　学会名簿に登録するタメノ名前は～。

例えば次の⑥は、格関係に置き換えられないこともないが、⑤―3と同じように考えた方が、元の文の意味をより正確にとらえることになる。

⑥　仕事で使う名前と戸籍上の名前は別だ。

↓1　仕事で（ある）名前ヲ使う

↓2　仕事で使うタメノ名前と～。

ここには、二つの問題点が示唆されている。一つは、「内の関係」は格関係に置き換えられるというが、形式的には複数の可能性があり、意味的により元の文に近い置き換えを行う必要があるという点である。もう一つは、形式上「内の関係」と思われる連体修飾節にも、「外の関係」と非常に近い位置にあるものが存在するという点である。後者の問題は本稿にとって重要な問題なので、この点についてもう少し考えてみよう。

先に挙げた⑤―3・⑥―2は、実は「外の関係」の意味関係を考える際に用いるパラフレーズである。寺村も、「外の関係」のうち普通の内容補充を行う連体修飾節について記述する中で、「コト」の名詞の一つとして、

「方法」「準備」「資格」「目的」その他、内容の修飾節が「……スルタメノ」あるいは「……スルダケノ」ということを表す場合

に触れ、「方法・準備・策・算段・修練・行事・資格・力・勇気」などが該当するとしている[3]。寺村が挙げている例を幾つか示す。（例文の記号は筆者）

l 少数党が多数党に対抗する方法は基本的には言論である。（新聞）

m 稲作のみのりを祝う行事がおこなわれていたのも、……（松本清張「古代史疑」）

n 「つまり、あの、要するに、僕はその人より駄目なんでしょうか。つまり、あなたの婚約者となる為の資格、と言いますか……」（石川達三「洒落た関係」）

o 俺には、「俺はもうお前がいやになった」と、女に面と向かって言い切るだけの勇気はおろか、そう考える勇気さえもなかった。（里見弴「善心悪心」）

また寺村は、別のところで「内の関係」と「外の関係」の関係に言及し[4]、

この稿では内の関係と外の関係という類別を主張しつつも、両者が必ずしも画然と全く性質の違うものとは必ずしもいえない、現実にどちらとも認定し難い場合があることを認めているのだが、その、どちらともきめかねる場合というのは、修飾部の述語に対して底の名詞が「～デ」という関係に立っている場合に限られているようである。

と述べている。確かに、「内」と「外」の境界領域にあると思われる連体修飾節には、「内」のデ格に置き換え可能なものが多い。先の寺村の挙げた例1～oも境界領域に属するものであろう。

l 少数党が多数党に対抗する方法
　↓ 少数党が多数党に（ある）方法デ対抗する

ただ、デ格では舌足らずになり、複合格助詞的な関係表示が想定される場合もある。

m 稲作のみのりを祝う行事
　↓1？行事デ稲作のみのりを祝う
　↓2 行事ヲトオシテ稲作のみのりを祝う

n あなたの婚約者となる為の資格
　↓1？（ある）資格デあなたの婚約者になる
　↓2 （ある）資格ニヨッテあなたの婚約者になる

o 「俺はもうお前がいやになった」と、女に面と向かって言い切るだけの勇気
　↓1？勇気デ「～」と女に面と向かって言い切る
　↓2 勇気ヲモッテ「～」と女に面と向かって言い切る

格関係とは、言うまでもなく述語動詞と名詞がどのような意味的関係にあるかを示す文法形式であり、日本語では格助詞がそれを明示する役割を担っている。しかし、明示すべき意味的関係を既存の格助詞ですべて担いきるかと言えば、決してそうではなく、そこに複合格助詞などの形式が要請される余地がある。従って、格関係への変換という操作も、既存の格助詞で置

き換えられる範囲に限定せず、もっと広くとらえることも必要なのではないだろうか。

ところが、仮にそのような前提に立った場合、典型的な「外の関係」とされるような連体修飾節でさえも、適当な表現を補うことによって、述定表現に展開することが可能になってくる。

⑦ 両親が並んで笑っている写真
　↓1？両親が写真デ並んで笑っている
　↓2　両親が写真ノナカデ並んで笑っている

⑧ 二人が偶然出会うシーン／場面
　↓1　（ある）シーン／場面デ二人が偶然出会う
　↓2　（ある）シーン／場面ニオイテ二人が偶然出会う

⑨ 花子が歌っている姿／ポーズ
　↓1　花子が（ある）姿／ポーズデ歌っている
　↓2？花子が（ある）姿／ポーズニヨッテ歌っている
　↓3　花子が（ある）姿／ポーズヲトッテ歌っている

⑩ さんまが焼けるにおい
　↓1？においトトモニさんまが焼ける
　↓2　においヲトモナッテさんまが焼ける

筆者はここで、すべての連体修飾節を何らかの格関係に戻すべきだと主張したいわけではない。格関係の範囲を広げて考えようとした場合、その範囲は際限なく広がる恐れがある。格関係を根拠として「内」「外」を決めようとしても、大胆な操作を試みさえすれば、「外」のかなりの部分を「内」として取り込める可能性があることを示してみたかっただけである。もしこの方向で押し進めていくと、「内」「外」と分類すること自体の根拠が失われてしまいかねない。

四　「内の関係」と「外の関係」の境界領域2
―評価性の名詞

「内」と「外」の境界領域の問題としては次のようなものもある。例文を挙げてみよう。

⑪ ここは幽霊が出る名所として有名だ。
　↓1　（ある）名所デ幽霊が出る
　↓2　幽霊が出るトイウ名所
　↓3　幽霊が出るコトニヨル名所

⑫ ここは幽霊が出る場所として有名だ。
　↓1　（ある）場所デ幽霊が出る
　↓2　幽霊が出るトイウ場所
　↓3？幽霊が出るコトニヨル場所

⑪は「内」「外」両方の解釈が成り立つ。1が「内」、2・3が「外」である。1は既に別の理由で「名所」と呼ばれる場所があり、そこに幽霊が出るという解釈、2は「名所」とはどんな名所か、その内容を問題にすると、幽霊が出るという事実がある、という解釈である。ところが3は2とも異なり、幽霊が出るということが原因で、ある場所が名所と呼ばれるようになったという解釈である。この場合、連体修飾節が被修飾名詞の根拠・原因である。被修飾名詞には何らかの評価を示す語が置かれ、連体修飾節の内容があってはじめてある評価を下せる

といった構造を成している。3の解釈が、被修飾名詞に評価的な語を要求することは、⑫と比較してみれば明らかである。（「場所」のように中立的な語では、3の解釈は成り立たない。）ところで、⑪の意味としては1 2 3のどれが適当だろうか。文脈によって左右されることはあるが、3の意味で用いられることが多いのではないかと思われる。以下も同様の例である。

⑬　味方の窮地を救った英雄が帰ってきた。

↓1　（ある）英雄ガ味方の窮地を救った

↓2　味方の窮地を救ったトイウ英雄

↓3　味方の窮地を救ったコトニヨル英雄

⑭　私の冷蔵庫はゴミ捨て場から拾ってきた代物だ。

↓1　（ある）代物ヲゴミ捨て場から拾ってきた

↓2　ゴミ捨て場から拾ってきたトイウ代物

↓3　ゴミ捨て場から拾ってきたコトニヨル代物

⑬では、味方の窮地を救ったからこそ「英雄」と評価されたのであり、⑭では、ゴミ捨て場から拾ってきたという出自だからこそ「代物」と低く扱われることになるのである。この、連体修飾節が被修飾名詞の根拠・原因となるという構造は、別の言い方をすれば、連体修飾節が被修飾名詞の評価の基準となっているということにもなる。

ここで連想できるのが、寺村の「相対性の名詞と、その相対概念の補充」[5]と奥津の「事柄の関係を示す相対名詞」[6]である。ここで言う評価性の名詞というのは、相対性の名詞とは本来別物であるが、連体修飾構造を形成する際には似た構造になる。つまり、連体修飾節で示された事柄が先に起こり、それが原因・根拠となって後に生じた結果・評価・感情・関係などが被修飾名詞で示されるという構造である。名詞が本来的に、もしくは文脈付与的に備える相対性を重視すれば、寺村の言う「逆補充」という考え方も理解できるが、評価性の名詞の場合は「逆補充」はあたらない。寺村は、「外の関係」イコール「内容補充的修飾」とみなし、それをさらに「ふつうの内容補充」と「相対的補充」に下位分類している関係で、「逆補充」という見方をせざるを得ないのだが、「内容補充」と「相対性」とは分けて考えてもよいのではないだろうか。先の⑪などの例で言えば、2は「内容補充」、3は「相対性」である。2は「トイウ」を、3は「コトニヨル」を補うと理解しやすいという意味でも、両者の連体修飾構造は別物と考えた方がよい。その上で、相対性の一種として評価性の名詞を位置づけてみてはどうだろうか。

五　新たな分類基準と問題点

これまで述べてきた問題点を踏まえ、筆者なりに考える連体修飾節のとらえ方の枠組みを以下に示しておきたい。

I　［　X　］↑〔　Y　〕…既存のYが何らかの形でXと関係を持つ構造

II　［　X　］↓〔　Y　〕…XがあってはじめてYが生じるという構造

※Xは連体修飾節、Yは被修飾名詞を表す。

Ⅰは、Ｙが既存のものとして存在し、それがＸの表す事態とどのような関係にあるかを示す構造である。一方Ⅱは、Ｘの表す事態が先に起きており、それを受けて生じた結果やそれをまとめた類概念をＹとして提示する構造である。では、Ⅰ・Ⅱには具体的にどのような連体修飾節が含まれるのだろうか。先行研究と対応させながら述べていくことにする。

まずⅠには、寺村の「内の関係」、奥津の「同一名詞連体修飾」がほぼ相当する。ただし、寺村が「外の関係」に入れた、「～スルタメノ」「～スルダケノ」という意味の「方法・準備」等（先の１・ｍも）はここに入る。また、高橋の分類の「関係づけのかかわり」「属性づけのかかわり」はここに入るが、「関係づけのかかわり」の中の後続者のかかわりはⅡに属することになる。

次にⅡは、大きく「内容補充」と「相対性」に下位分類される。「内容補充」には寺村の「ふつうの内容補充」「感覚の名詞」の一部、奥津の「付加名詞連体修飾」、高橋の「内容づけのかかわり」「特殊化のかかわり」「具体化のかかわり」がほぼ相当する。「相対性」には寺村の「相対的補充」「感覚の名詞」の一部、奥津の「相対名詞」、高橋の「関係づけのかかわり」の中の後続者のかかわりが属する。前節で検討した評価性の名詞もここに入ることになる。

ここで紹介した分類は、統語的な関係と意味的関係の両面から連体修飾構造をとらえようとする試みである。連体修飾節と被修飾名詞との意味的な関係からⅠⅡと大きく分けたが、細部の分類には置き換えを含めた形式的な操作も使用している。また、別の見方をすれば、Ⅰは名詞から動詞句への統語的関わりを重視し、Ⅱは動詞句から名詞への意味的関わりを重視した分類とも考えることができる。

本稿は序説ということで、分類の枠組みを提示するにとどめ、細部の検討は実例の分析も含めて別稿に譲るが、この分類についての問題点に少し触れておきたい。

まず、連体修飾節と被修飾名詞の時間的・論理的前後関係を分類の基準にする場合、「作る」等のいわゆる「生産動詞」の問題がある。関係性から言えばⅡに含まれることになるが、格関係を意識すると、他の目的格と同様、Ⅰに含まれると考えた方がよいかもしれない。

また、いわゆる「感覚の名詞」は「内容補充」と「相対性」に分けられるが、「トイウ」の挿入の可否などで不整合が出る恐れもないとは言えない。残された諸問題とも併せて別稿で検討する予定である。

（注）

（1）・寺村秀夫「連体修飾のシンタクスと意味―その1―」（『日本語・日本文化』四号　大阪外国語大学留学生別科一九七五年八月）本稿では、後に『寺村秀夫論文集Ⅰ』（くろしお出版　一九九二年二月）に再録されたものを使用。一九五～一九六ページ

・奥津敬一郎『生成日本文法論』（大修館書店　一九七四年九月）九七ページ及び一六ページ

（2）A高橋太郎「動詞の連体修飾法」（国立国語研究所論集1『ことばの研究1』　秀英出版　一九六〇年二月）

B高橋太郎「動詞の連体修飾法（2）―場所的な結びつきと状態的な結びつき―」（国立国語研究所論集2『ことばの研究2』　秀英出版　一九六五年三月）

C高橋太郎「動詞の連体形「する」「した」についての一考察」（国立国語研究所論集4『ことばの研究4』秀英出版　一九七三年一二月）

D高橋太郎「連体動詞句と名詞のかかわりあいについての序説」（言語学研究会編『言語の研究』　むぎ書房一九七九年一〇月）など。

これらの論文はすべて後に以下の著書に再録された。

E高橋太郎『動詞の研究―動詞の動詞らしさの発展と消失―』　むぎ書房　一九九四年三月

本稿ではEを使用し、この後記載するページ数もEによるものとする。

（3）寺村秀夫「連体修飾のシンタクスと意味―その3―」（『日本語・日本文化』六号　大阪外国語大学留学生別科一九七七年九月）『寺村秀夫論文集Ⅰ』に再録。二八三～二八四ページ

（4）寺村秀夫「連体修飾のシンタクスと意味―その2―」（『日本語・日本文化』五号　大阪外国語大学留学生別科一九七七年三月）『寺村秀夫論文集Ⅰ』に再録。二二九ページ

（5）（3）の二八七～二九六ページ

（6）（1）の『生成日本文法論』三一三～三一五ページ